

平井元喜ピアノ・リサイタル

若手コンポーザーピアノニスト平井元喜がロンドン公演に続き英国がん基金のためにチャリティコンサートを開いた。前半はまずバッハ／パルティータ第2番。ピアノならではの実に流麗で多彩なバツハで瑞々しい自然体の名演。次はベートーヴェン／6つのバガテル。意外に演奏されない楽聖晩年の小品集だが、表現力豊かな平井の演奏で聴くとこれが紛れもない傑作であることがわかる。前半最後はいよいよ自作の組曲「伝説の詩(うた)」2018年阪の日本初演。先頃ロンドン公演で初演された15の民話を音楽化したイマジネーション豊かな小品集だが素材だが繊細で実に味わい深い秀作揃い。後半はまずシューベルトの歌曲の編曲物で、平井自身による「海辺にて」、ゴドウスキー編「朝の挨拶」、そしてリスト編セラナーデ。さらにシヨパンの6つのポーランドの歌より「乙女の願い」と「春」を挟み、最後はメンデルスゾーンのロンド・カプリチオーソ。アンコールの2曲目には自作の追憶のプレリュード第2番も。(11月13日、浜離宮朝日ホール) (浅岡弘和)

エリソ・ヴィルサラーゼ

ピアノ・リサイタル

ロシア派本流にしてトピリシ出身。最初の6つの間奏曲Op4は明暗の感情絡み合う複雑な曲。明晰で潤いある音が様々なモチーフを浮かび上がらせたものの、漠然とした印象を残す。続いてダヴィッド同盟舞曲集。各曲の性格は明・動、暗・静、またその混在が指定され、技術的にも何の苦もなさそう。鋭角なアタック、曲想的確な切り替え。全ての表情がやり過ぎない理にかなったロマソン。だが内奥に分け入ろうとせず、整然とするあまり、どこかスケッチ風に。名教師であることと無関係ではないだろう。後半のシヨパンはバード2番、3番にノクターン3曲とワルツ6曲を挟む。バラードは気品に満ちて、強弱レンジは中庸、ルバートは最小限、高揚感は八分に止める。ノクターンといえば、歌わせがフルートのように端麗。ワルツは3拍子感が薄く流麗。古典舞踊かとも。クレメンティの流れをくむシヨパンだ。シューマンはシヨパンの奏法が被さったかもしれない。(11月27日、すみだトリフォニーホール) (高塚昌彦)

イェルク・デームス

90歳記念ピアノ・リサイタル

巨匠はまず冒頭を、バッハ「半音階的幻想曲とフーガ・二短調BWV903」から始めた。あつさり淡々と、しかし一音一音を揺るがせにせず、丁寧に弾きこんでゆく。2曲目はモーツァルト「ロンド・イ短調K511」、さきの曲に続いて、むしろ曲の対位的な立体感や構造を大切にしているような演奏だ。続いてベートーヴェンの最後のソナタ「32番」。冒頭の気迫、迫力は凄く、そして第2楽章では変奏のリズミカルさ、和声進行の妙をきつちりと捉え、トリルの完璧なコントロールが、法悦の境地を生み出した。

休憩後はこのピアノニストの得意な側面のひとつ、ドビュッシーの「映像」第1・第2集。優しく和音の流れを繰り広げてゆく。そして最後はフランク「前奏曲、コラールとフーガ」、敬虔な世界の提示。アンコールにドビュッシー「沈める寺」と「月の光」(この硬質で明晰なアルペジオは本当に美しかった!)、そして自作曲「ソング・オブ・ラヴ」(?!)(11月28日、紀尾井ホール) (倉林 靖)



イェルク・デームス 90歳記念ピアノ・リサイタル
(©林喜代穂)



エリソ・ヴィルサラーゼ
ピアノ・リサイタル